# FACULTY DEVELOPMENT

# INVITATION

山梨大学教育人間科学部
第17号
March. 8, 2006

==========

## ２００５年度　山梨大学教育人間科学部　ＦＤ講演会報告（2006年2月1日）

==========

### 鈴木誠先生をお迎えして ―授業改善こそFDの命―

教育人間科学部長　　堀　　哲夫

FD 研修の目的についてはさまざまなとらえ方があるが、もっとも大切なことの一つは、教師自らの授業改善の方法を学び身につけることにあると考えられる。教師の能力開発は、もちろん教師自身の力量形成のために行われるのであるが、その背景にはそこで獲得・形成された資質や能力が学生に対する教育に反映されることが前提となっている。

今回の FD 研修は、北海道大学高等教育機能開発総合センター教授鈴木誠先生をお迎えして講演をしていただいた。演題は「学ぶ意欲を引き出す授業デザインとは」であり、先生自身の具体的授業改善が内容となっていた。

今回鈴木先生にお願いすることになったのは、以前から学会等で旧知の仲であること、先生が多くの大学の FD 研修に招かれて講演をされてきていることなどであった。授業改善を基礎にして考えると、これ以上の適任者は先生を除いていなかった。

この講演の中で多くのことを学ばせて頂いたが、とりわけ印象に残ったのは「学生を授業の文脈の中に据えることの重要性」であった。学生の学ぶ意欲はまさに授業に能動的に関わらせることであると思う。だが、これが意外と難しい。その具体的な方法を直接伺うことができたのは大きな収穫であった。自分の授業に取り入れることができれば、鈴木先生も喜んでくださるに違いない。

**********

## 学ぶ意欲を引き出す授業デザインとは

学部ＦＤ講演会が、2月1日（水）の15時から2時間あまりにわたっておこなわれました。日本理科教育学会賞受賞を受賞された理科教育理論のみならず、ユニークな授業実践でも有名な北海道大学の鈴木誠先生をお招きして、「学ぶ意欲を引き出す授業デザインとは」と題して、学生にとって魅力ある授業・学生の学ぶ意欲を引き出す授業について実例をまじえながら解説していただきました。本学部の教員だけでなく、事務職員や大学院生に加えて工学部教員の参加もあり、会場のＪ号館Ａ会議室には50名あまりの聴講者が集まりました。講演の様子は、テレビ会議システムにより玉穂キャンパスにも中継されました。

なお、講演の模様はビデオ撮影され、鈴木先生の許可を得て「山梨大学講義配信サービス」に3月末を目途に保存・公開される予定です（http://www.ipc.yamanashi.ac.jp/video/）。また、事前資料として鈴木先生の論文「学ぶ意欲を引き出す授業とは何か」のPDFファイルが1月31日付けの電子メールでＦＤ委員会から配信されています。T.I.

**********

**Q&A**

講演当日も会場からの質問に、鈴木先生は一つ一つ熱心に答えられていました。

講演後、アンケートでの質問に加えメールでも質問が寄せられましたので、後日、鈴木先生に送ったところ、なんと２時間後には回答が戻ってきました。問題校の教師時代、生徒の答案は（「できない生徒ほど気にするので」）必ずその日につけていた鈴木先生ですが、自分を律する厳しさをあらためて感じた次第です。

講演中の鈴木先生

**Q**：高校時、授業が成り立たないようなクラスにもかかわらず、授業ができるような状況に変えていった点について、そういう変化を起こす要因として、重要なのは何でしょう。

**鈴木**：教師の理念、指導観をしっかり伝えることだと思います。「なぜ生物という授業が必要なのか」「今日の目的は何なのか」「どのような力が君につくのか」などと。また、それに付随することですが、自分の指導方針をしっかり伝えることです。例えば、私は 1 年間の最初の授業の時に、皆平等に扱うこと、過去の成績にこだわらないことなど数項目を宣言していました。また、授業中、遅刻やガムなどの飲食、ケイタイ(当時はポケベル)など様々な問題も見逃さず、その都度授業や実験を止めて、理由を聞き、何がまずいのか丁寧に伝えていきました。大学生でも同じで、真っ向勝負が必要です。生徒は教師の姿勢を観ているからです。これをうやむやにしていると、生徒は絶対ついてきません。その積み重ねが、授業成立につながっていきました。最後の頃は、本当かどうか知りませんが、悪さをする奴らは「まこっちゃんの言うことなら仕方ないじゃん」と言っていたらしいです。

Q：本物との接触や体験などということは、とてもすばらしいと思います。しかし、今年の小学校の教員になった同級生の話を聞くと、本物との接触や体験（例えば、マラソンは子供に何かあった場合に、責任をどうとるのか、又、同学年で歩調を合わせなければならない等）が難しいように思います。そのような場合、私たちはどのように接触や体験ということを取り入れられるのだろうかと感じました。又、学生のモチベーションはどのようにしたら高まるのでしょうか。

鈴木：教育現場で実践するには、いかにシンパを作るか、学年主任やいわゆる管理職を抱き込むかという戦略を十分練ることがポイントです。新しいことに挑戦することを躊躇する習慣が教育界にあります。それを突破できるのは、崇高な目的と周到な準備、そして教師の情熱です。「志あるところ道は通ず」です。

モチベーションについては、講演の話のとおり、相手のレディネスを捉え、モニタリングしながら、ご自身の授業デザイン（目的・授業方略・授業形態・教材・評価・学習指導）を展開されることです。上の質問も参考になろうかと思います。

Q：大学１年から専門科目の履修に意味を感じておりますが、先生はどんなお考えでしょうか。

鈴木：私も同感です。大学初年次の早い時期に、学問の醍醐味や難しさ、面白さを伝えることは、彼らのモチベーションを高める上で大変重要と思います。ちなみに「蛙学への招待」は、専門用語だらけです。

Q：フィンランドの高等教育の実態と小中教育との関係について

鈴木：高等教育については研究対象外ですので、詳しくありません。ただ、フィンランドは競争社会ではありません。大学資格試験に合格した後、徴兵されます（できぬ者は一定期間ボランティア）。そして、様々なところで働き、資金ができたら個別に大学を受け学生となります。修士終了は５年ですが、８，９年在籍するのはざらです。学費がただという背景もありますが。非常にまじめな国民で、ヘルシンキ大学やオウル大学、ヘルシンキ工科大学などで学生と会いましたが。

知的好奇心が旺盛でした。独立心が強いのです。ちなみに、フィンランドでは１８までで子育ては終わりだそうで、「大学院の長男が出ればやっと子育て終わりだ」といったら、笑われてしまいました。

Q：教材などの費用はどこから出されるのでしょうか

鈴木：「蛙学への招待」の解剖材料については、全学教育委員会に毎年申請しています。その他の消耗については、私の科研費や研究費を使っています。あまりかかりません。

**********

FD リレーエッセイ

## オールマイティであること

家政教育講座　近藤恵

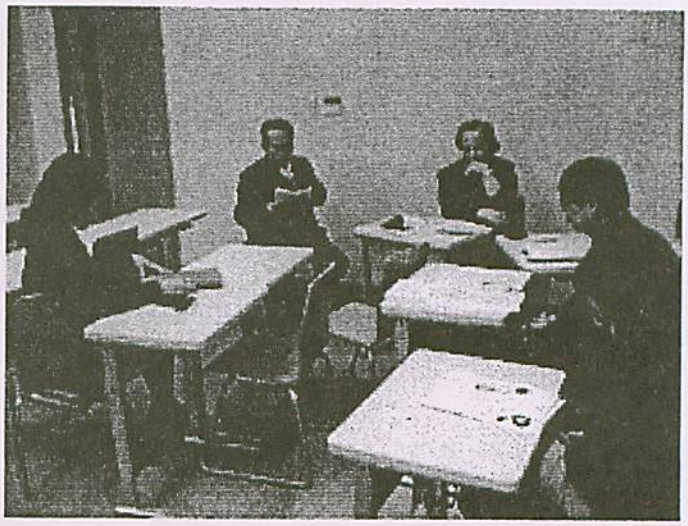
学生の頃に見た一本のビデオ「ミニ社会の仲間たち」（エイボンプロダクツ製作）は、とても刺激的で今の仕事に大変役立っている。その中に映し出された「ミニ・ソサエティ」（ミニ社会）という全米の小・中学生を対象としたプログラムにはまさに“目から鱗”、それまで私が抱いていた授業のイメージを一変させた。教室内を某国某州某市の地域社会に見立て、自分たちでルー

ルをつくり、その社会の中で通貨を発行し、製品あるいはサービスの売買をする。子どもたちは実社会で遭遇するのと同じ問題、そして問題解決に熱心に取り組みながら経済の基本的な概念を学んでいく。見ているだけでとにかく楽しい気分にさせられた。

「ミニ社会」で学ぶ子どもたちのように、子どもは皆、教師に楽しくわかりやすく教え導いて欲しいと願っている。今まで知らなかったこと、気づかなかったことを発見したいと願っている。そしてその点は、大学生であっても変わらないだろう。家庭科の教科教育法を担当している私にとっての『ＦＤ』は、これまで小・中・高の現場や学生に向けて“家庭科の授業とはこうあるべきだ”と発信してきたことが、そっくりそのまま自分自身に跳ね返ってきたという感覚である。家庭科は、実践的・体験的な活動を通して学ぶことが欠かせない教科であるため、その指導法については数々の提案がなされてきた。これまでも、そのような提案を発しながら、それを自分自身の問題としても捉えてきたつもりではあるが、「今日の授業は上手くいった」と思える日は少なく、試行錯誤し一喜一憂する日々である。

とはいえ、大学の授業が小・中・高での授業と同じでよいのかと問われれば、やはりそうではないのであろう。大学で教育に携わる者には、研究活動を行うことが保証されている（あるいは、研究する責任がある）。大学の教員が持つ最先端の知見を含めながら、楽しくわかりやすく教えることができ、私がかつてそう感じたようにインパクトを与え、なおかつ、それが学生にとって（直接的であれ、間接的であれ）有用であれば理想的であろう。近年、大学の教員は、教育あるいは研究のいずれか一方を、一方が欠ける言い訳にすることはもはや許されない状況に迫られている（ように見うけられる）。この原稿の執筆をきっかけに、大学教員もまた、すべての分野においてオールマイティであることが求められているということをつくづく実感させられた。

次回のエッセイは、生涯学習講座の川村協平先生にお願いします。



第二回 FD ウィーク公開授業の風景